

# 令和2年度 大学教育センター「授業研究」(FD研修)の記録

「授業研究」という手法は、明治以来我が国では特に初等・中等教育の現場で続けられており、教員の実践力向上におおいに寄与してきた。この手法は、高等教育においても、授業改革のための有効な一つ契機となる。とりわけ専門の壁が高く聳えるなかで、同じ科目を担当する教員同士にとどまらず、異なる科目の授業においても、授業後の検討会等で批評を展開する。授業者自らの授業課題をフィードバックするにとどまらず、学修者実態に関する認識も共有し、各々の授業実践を客観化して、ともに授業改善の方策を探ることができる。

以上の考え方のもとに、本学では授業改革の一環として大学教育センターを中心に「授業研究」を実施しており、昨年度はその歩みを一旦振り返り、総括したところである。

本年度は、厳しいコロナ禍の中で対面授業から遠隔授業に切り替えざるをえず、新たな課題を抱え、これをテーマに据えて全学FD研修も行われた。そのなかで、大学教育センターを中心にするこれまでのかたちでの「授業研究」は難しくなり、今年度は新たなかたちを探ることとなった。

今年度は、2本の授業実践記録を本誌に寄稿いただいて、これを皆が閲読することでもって実質的には従来の「授業研究」の歩みを継続することとした。この「授業研究」が、各位における授業改善のために資することを願っている。

## 授業実践報告 1

### 「English for World Travel」を使った授業

大学教育センター 上西 幸治

#### 1. 授業のねらい

使用テキストは「English for World Travel」(英宝社)である。テキストの内容は、タイトル通り、英語を使用しながら世界を旅行し、困った状況などを経験しながら英語の重要性及びその技能をより高めていくものとなっている。そのための授業のねらいとしては以下のとおりである。

- (1) 旅行会話に必要な英語表現を学習すること
- (2) 語彙力を増強すること
- (3) 英語の4技能の中でも、特にリスニング力、スピーキング力を伸長し自己表現力を高めること
- (4) 楽しく英語を学習すること

#### 2. 授業の実際

本授業では、Unit 6: Visiting a museum を扱った。授業の展開は以下のとおりである。

まず、Warm up として教科書内にある2枚の写真を見て英語で表現する。ハンドアウト(資料1)を配布し、そこにテキスト内のUnitの最初にある2枚の写真について英語で記述させていく。所要時間は約2分である。そのあと、本来であれば、ペアワークを行うのであるが、このような状況下であり、残念ながらその活動は実施できていない。その代わりに、教師の方が、教室を回り可能な限り学生に写真を英語で説明するように求めていった。英文で説明がしにくい学生は、まずは単語でもよいから自分で表現しようとしていくことが大切である旨を伝えて、やる気を促していった。

次に、それら2枚の写真について教師が説明をしていく。写真を説明している英文の中に空欄があるハンドアウトを用意し、聞きながら穴埋めをしていくように工夫している。この空所補充に関しては、机間指導をする中で、一部の少し難解な語彙を除いて、かなりの学生が埋めることができていた。その空所を学生に問いながら確認をしたあと、説明する英文の意味を確認するために日本語訳の穴埋めを行わせた。

さらに、このUnitがアメリカ合衆国のシアトルを旅行する会話であるので、教科書内にある質問を取り上げて、学生にアメリカ合衆国についての知識を自ら問うてみるようにした。いくつかの項目(資料2)を白板に記載して、これまでの知識を基に答えをハンドアウトに記述するように指示した。

資料2にある最初の項目(National flag)に関しては、プリントの右端にアメリカ国旗を書いてみるように促した。ほとんどの学生が自分の記憶を基に書いていた。大体書き終わっていることを見計らって、次のような質問をした。

「I have a question about the flag. Do you know what the national flag of the US is called?」

学生の反応があまりなかったので、教師の方で答えを言った。

「That is called the Stars and Stripes. Did you get it?」

確認のために教師がそのスペリングと大まかなアメリカ国旗を白板に描き、質問を続けた。

「How many stars are there in the flag?」(国旗の左上に書いたいくつかの星を指しながら)

「How many stripes are there in the flag?」(国旗全体の横の模様を示しながら)

何人かの学生に答えを聞いてみたが、正解は得られず、教師の方で答えを言いながら、その理由についても以下のように説明をした。

「The number of the stars is 50. It is the number of the states in the USA.

Also, the stripes mean the number of the states which became independent from the Britain in the 18<sup>th</sup> century (1776). Thirteen stripes mean 13 states.」

続いて具体的な他の項目について、しばらく時間を与えて記述するように促した。記入が済んだころ、一つひとつの項目について、学生に問いながら、答えを確認していった。

さらに、シアトルについて以下の質問をした。

「What do you know about Seattle?」

少し時間を与えて考えさせた後、何人かの学生に知っていることを尋ねた。すると、学生から野球のシアトルマリナーズなどの返答があった。そこで、シアトルに関して、その市の地図上の位置を学生に確認させることから始めた。アメリカ全体の時と同じように、英語で「Do you know where Seattle is?」という質問をした。

続いて教師が、白板に大きくアメリカ合衆国の地図を描く。地図上のロサンゼルスやニューヨークなどの大都市の位置、7か所に黒丸をつけ、AからGのローマ字を書く。そこで、以下の質問をする。

「Where is Seattle among A to G? Please think about it. Alright? Please raise your hand if you think it is correct. Are you ready? ...」

クイズ形式的なやり方で学生を授業に引き込むことも、この目的であった。学生は、この質問にはかなり真剣に手を挙げていた。残念ながら、正解の学生はほとんどいなかった。シアトルという名前は聞いたことはあるものの、具体的な位置について知る学生は少なかったようだ。そのあと、資料2に挙げたいくつかの項目について、学生に確認をさせた。

少し長いWarm up活動を終了し、教科書内の次の問題に移る。「Extract from Wings Café menu」の表を見て、4つの英語の質問に答えるものである。少し時間を与えて考えさせ、そののち数人の学生に答えを尋ね、解答の確認をした。

最後はリスニング活動である。ダイアログ「At the museum café」を聞いて、その中の5つの空所を穴埋めするものである。2回ダイアログを聞かせ、空所を埋めさせたが、中には少し難しいと感じる学生がいるようだった。そこで、教師の方が空所となっている箇所だけを、さらに2回ずつ読み上げ、できるだけ空所を埋めさせるようにした。そのあと、学生に尋ねながら答えの確認をした。

### 3. 受講者の状況

全体的には、まじめに授業を受ける傾向があるが、そもそもハンドアウトに自分の答えを書いている学生も中にはいた。そのような学生には、その作業をさせているときに教師が机間指導をする中で、「単語でもいいから書いてみよう」などと少し激励のような言葉をかけた。それから、全体的には教師の問いに対して真摯に答えようとする傾向もある。そうはいつても、英語で返答することを躊躇する学生もいる。

### 4. 自己評価

本時の授業に関して、大体計画通りにはできていたと感じている。しかし、多少 Warm up 活動に時間を取られすぎたようにも思った。というのも、本時の計画では最後のダイアログの穴埋めが済んだ後、その意味の確認までする予定でいたからだ。とはいえ、ダイアログの内容に関するアメリカ合衆国という国について、少しでも考える機会を与えられ、その国についての知識を増やせたことは意義深いと感じている。また、語彙力やリスニング力を多少なりとも伸長できたと思っている。本時のねらいの一つである「楽しく英語を学習する」という項目に関しては、学生が十分に英語(学習)を楽しんでいたかどうかは定かではないが、授業中の学生の表情を見る限りでは、それなりに楽しんでくれたと思っている。

### 5. 課題と展望

本時の課題としては、以下のとおりである。

まず全体的な観点から述べると、ハンドアウトを提示しながら活動をさせたことは意味があるが、それぞれの活動が教師の主観的評価にしかかかっていない。実際にハンドアウトを使用しての活動が、学生にとって具体的にどのような意義があったのかをアンケートを通してデータを得ていれば、学生からのより明確な客観的評価が得られたであろう。

Warm up 活動に関しては、時間に余裕があれば、実施したアメリカやシアトルについて学生自身が得ている知識だけで答えるのではなく、スマートフォンなどを使用して調べ学習をすることも考えられる。

また、コロナ禍の状況下で実施している対面授業なので指導上難しい面もあるが、授業をもっと活力のあるものにするにはどのようにしたらよいのか、試行錯誤していく必要がある。

今後の展望として、もっと授業の工夫をするために、他の教師からよりよいアイデアを得たりすることによって、学生にとって英語を受講した充実感をより味わえるような授業展開が可能と考える。

#### 資料1

<b>Photos Descriptions in Unit 6 (1)</b>	
No (	) Name (
<p>Photos Descriptions for Warm up Unit 6 (1).</p> <p>Listen to the teacher about the photos and fill in the blanks on the task sheet.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● The top-left picture is of the Seattle _____ (including the Space Needle, an _____) with Mount Rainier _____.</li> <li>There are some _____.</li> <li>_____ you can see a _____.</li> <li>It's a _____.</li> </ul>	

- The top-right picture is of Wings Café at the \_\_\_\_\_ in Seattle. There's a \_\_\_\_\_ at the \_\_\_\_\_. A member of the café staff is \_\_\_\_\_, and there are some \_\_\_\_\_.

Fill in the blanks in Japanese.

- 左上の写真は、レーニア山を\_\_\_\_\_シアトルの\_\_\_\_\_ (スペースノードル、\_\_\_\_\_を含む) です。\_\_\_\_\_がいくつかあります。\_\_\_\_\_には\_\_\_\_\_が見えます。\_\_\_\_\_です。
- 右上の写真はシアトルの\_\_\_\_\_にあるウィングスカフェです。\_\_\_\_\_には\_\_\_\_\_があります。\_\_\_\_\_にカフェスタッフが\_\_\_\_\_いて、カフェには何人かの\_\_\_\_\_がいます。

Warm up questions:

- 1) What do you know about the U.S.? What do you know about Seattle?

## 資料2

The USA:

- National flag: ( ) Please draw the flag.
- Capital: ( )
- Population: ( )
- Major sports: ( )
- Languages: ( )
- Economy: USA has ( ) economy in the world.
- Holidays: ( Christmas, ), etc.

Seattle:

- Location:
- Population: ( )
- Economy: ( )
- Sports: ( )
- Sister city of Seattle: ( ) in Japan

## 授業実践報告 2

### 「インターネット・リテラシー入門」オンライン遠隔授業の実施

大学教育センター 記谷 康之

#### 1. 授業の概要

「インターネット・リテラシー入門」は、共通教育科目教養科目 A 群に割り当てられている科目である。この科目のねらいは、インターネットを利用する上で必要となる、情報技術や情報科学、法律や規制そして倫理と道徳について学習し、健全な情報社会をめざすための方策を理解することである。この科目を履修することによる到達目標は、「インターネットの利用が個人と社会に与えている影響について理解できる」、「インターネットの利用にあたっての基本的なスキルおよびマナーが身につけている」、「インターネットを使って目的の情報を取捨選択し、自分の意見として整理・編集できる」としている。

インターネット・リテラシーとは、「インターネットを正しく使いこなすための知識や能力」と定義される。「インターネット」の進歩は著しく、また「リテラシー」に発展的な解釈を許すのであれば、「インターネット・リテラシー」は、道具としてインターネットを使える能力ということだけでなく、「インターネットを使う意義や目的を明確に認識し機会があれば説明できる」、「インターネットに提供される情報サービスや情報技術をその時々状況に応じて適切に使う」、「インターネットを社会活動の一つの場としてとらえマナーやルールを守って行動できる」ということになるだろう。そのうえで、健全な情報社会をめざすためにインターネット・リテラシーを身につける意義は何かを考えていくことを目標とした。そのための視点として「ICT・法律・モラル」を示した。ICT はインターネット・リテラシーを技術と科学から考える視点、法律は文字通り社会に存在する規制・法という視点、モラルはインターネットの利用者がもつ倫理・道徳という視点である。インターネット・リテラシーを考える基盤として、この 3 つの視点を使って講義でネットワーク技術やネットワーク社会の現状を知り、課題演習で自分の考えをまとめさせることとした。

授業は、本学のオンライン学習管理システムであるセレッツを使い、オンライン遠隔授業で実施した。時間割の開始時間に教材を提示し、提示後 1 週間以内に各回の学習を進める非同期オンデマンドで授業を行った。また毎回、時間割で決められた開始時間から一定期間の間に、必ず出席登録システムのレスポンスを使って出席を登録させた。

表 1 「ちょっとアンケート」の設問

<p>1. 今日の授業で成長・進歩したと感じられるか? [成長感] Yes、No、?(どちらともいえない) のいずれかを選択</p> <p>2. 今日の授業の理解度はどうでしたか? [理解度] 6 段階の理解度、「1.既に理解済み、退屈」「2.ほとんど理解できる」 「3. 2、3 わからない」「4.半分わからない」「5.わからないことが多い」 「6.全くわからない」のいずれかを選択</p> <p>3. あなたにあてはまることはどれですか? [気づき] 授業に関する 6 つの気づき、「何かわかった」「何か面白かった」 「何かできた」「満足した」「工夫した」「がんばった」を選択、複数選択可</p> <p>4. 振り返ってみて成長・進歩の理由、授業について書いてください? [自由記述]</p>
--

学習はテキストを使って行った。テキストは見開きで1つの事項について説明している。たとえば「ネットショッピング」、「携帯電話網」のような事項があり、基本事項の説明と事例の紹介等が示されている。これを各回のテーマに関連する5から10の事項をテキストから取り上げ、音声付きスライドを作成しテキストを解説した。受講生には音声付きスライドを視聴させ、テキストを読ませた。その後、知識の定着を確認するため小テストに回答させた。小テストは、穴埋め式の設問で、語群から適切な語句を見つけて入力する形式で実施した。また各回の学習の終わりには、自分の学習状況を振り返るように、「ちょっとアンケート」と名付けた、表1のような4つの設問に回答させた。

授業は講義を中心としたが、ネットワークの基本事項について情報検索を行う課題、ICTに関するトピックについて要約を行う課題、インターネット・リテラシーに関する問題についてレポートを作成する課題を演習として行った。課題演習の解答は匿名化し、セレッソの掲示板やコースコンテンツを使って履修者相互に閲覧できるようにした。またレポートはピアレビューを実施し、担当を決めてコメントを書かせた。

## 2. 履修者の反応

### ・出席状況

出席登録は時間割上の授業時間中に行うこととしていたが、他の科目で対面授業が再開された第9回から、授業開始時間から授業日のうち(23時59分)までを登録時間とした。表2に1回から15回までの出席登録率を示す。15回を除いて毎回、85%以上の出席登録があった。授業へはほとんどの学生が出席していた。

表2 レスポンによる出席登録率の推移

1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回
100%	86%	86%	90%	95%	93%	95%	97%	98%	97%	97%	92%	97%	85%	76%

### ・小テスト

小テストは9回実施した。表3に小テストへの回答率と平均点を示す。後半3回は回答率が90%を下回ったがおおむね90%前後の履修者が解答していた。毎回授業内容に応じて設問数が増減したが、平均点は概ね90点前後であった。平均点が高得点であるのはテキストなどの参照を禁じていなかったためである。

表3 小テストの回答率と平均得点

	2回	3回	4回	6回	7回	8回	10回	11回	12回
回答率	98.3%	98.3%	100.0%	96.6%	98.3%	96.6%	89.8%	83.1%	89.8%
平均点 (100点満点)	92	93	95	85	82	73	88	89	88

### ・「ちょっとアンケート」

毎回のアンケート回答から、成長感、理解度、気づきについて集計した。表4は2回以降の各回の成長感についての回答を集計したものである。6回から回答者が減少している。全体的には成長・進歩を感じたと回答している者が多い。

表 4 授業各回の成長感の推移

授業回	Yes	No	?	回答者計
2	42	2	7	51
3	38	1	11	50
4	38		12	50
5	48		7	55
6	37		6	43
7	37	1	6	44
8	36		4	40
9	27	1	10	38
10	39		3	42
11	35	2	7	44
12	38	1	2	41
13	32	1	9	42
14	36	2	5	43
15	35	1	4	40
合計	518	12	93	623

表 5 は 2 回以降の各回の理解度について回答を集計したものである。全体的に「ほとんど理解できる」と回答している者が多く、「わからないことが多い」、「全くわからない」と回答したものは少なかった。授業回のうち 3 回と 4 回は「2、3 わからない」、「半分わからない」、「わからないことが多い」の回答を合計するとその回の回答者の半数以上であった。ネットワークのしくみについて学習する回であったが、他の回に比べると日頃なじみのない用語が多数登場し、プログラミング言語や HTML のように説明を見るだけではイメージしにくい学習内容が多かったため理解度の評価が低下したと推察される。

表 5 授業各回の理解度の回答数

授業回	既に理解済み、退屈	ほとんど理解できる	2、3 わからない	半分わからない	わからないことが多い	全くわからない
2	2	40	4	5	0	0
3	1	24	13	7	5	0
4	0	23	19	6	3	0
5	1	44	7	1	2	0
6	0	33	8	1	1	0
7	0	30	7	4	3	0
8	0	22	10	5	3	0
9	3	26	6	2	1	0
10	1	35	3	3	0	0
11	1	35	5	2	0	1
12	1	36	2	2	0	0
13	1	31	7	2	1	0
14	1	38	2	2	0	0
15	2	35	2	1	0	0
合計	14	452	95	43	19	1

表6は2回以降の各回の気づきについて回答を集計したものである。複数選択が可能な設問である。全体的には「何かわかった」の回答が最も多く、次いで「がんばった」、「何か面白かった」の順で回答が多かった。「何かわかった」と「何か面白かった」を共に選択する履修者は多かったが、「がんばった」だけを回答した履修者も少なからずいた。気づきの回答には教材や授業進行に対する履修者の肯定的な反応が示されることもあり励みになることも多い。5回は他の回に比べて複数の気づきに反応がみられた。この回はビデオ会議システムを使ったリアルタイムの教示と、学生からはチャットによる質問を受けつけたことが回答に反映しているものと考えられる。

表6 授業各回の気づきの回答数

授業回	何かわかった	何か面白かった	何かできた	満足した	工夫した	がんばった
2	35	23	6	14	2	13
3	29	14	7	6	2	24
4	31	12	8	6	3	20
5	27	18	19	13	4	20
6	27	18	4	5	2	15
7	29	13	6	8	2	20
8	25	11	7	7	1	21
9	24	6	2	4	2	13
10	33	11	8	9	1	14
11	31	13	11	9	1	18
12	28	15	6	9	0	15
13	25	9	6	7	3	17
14	28	15	9	6	4	20
15	30	17	8	7	1	14
合計	402	195	107	110	28	244

### 3. まとめ

今年度の「インターネット・リテラシ入門」はCOVID-19感染拡大防止の対応として、履修生とは非対面の遠隔授業で実施した。オンデマンド授業のため、履修生の反応がリアルタイムに感じられない点があり、対面授業と異なる難しさがあった。

テキストの使用、音声付きスライドによる解説、小テストによる学習内容の確認を繰り返す授業形式を定型的にすることで、学習への取り組みが安定するように意識した。「ちょっとアンケート」の回答を参考にし、後続の回には解説に使う例示を身近なことがらに変更し、丁寧に説明するように心がけ、自由回答のコメントや質問を可能な限り次の回の教材に紹介するようにした。これらの取り組みが学生の授業参加度と学習内容の理解度に反映しているかどうかは十分検証できたわけではないが、履修生からの反応から一部分はうかがい知ることができた。

今後に向けては、授業回によってはビデオ会議システムも併用し、履修生のリアルタイムの反応を把握できるように授業進行を工夫したいと考えている。またCOVID-19以降も予習や復習などに活用できるようオンデマンド教材の改善に取り組みたい。